



Martyres

[殉教者、日本二十六聖人に捧ぐ]

Martyres (マルティレス-殉教者)

Martyres(羅:マルティレス)とは自身の信仰のために命を失った人、殉教者を指します。特に、カトリック教会においては崇敬の対象となっています。

日本二十六聖人とは

1597年、キリスト教信仰を理由に長崎の西坂で26人のカトリック信徒と宣教師が処刑されました。1862年になるとカトリック教会の聖人に加えられた(列聖)ことから、現在「日本二十六聖人」と呼ばれています。

信仰の起り

1549年にフランシスコ・ザビエルを中心としたイエズス会士が来日したことを皮切りに、貿易拠点の九州を中心としてキリスト教信仰が広まります。武士や庶民も洗礼を受け、教理本「どちらなきりしたん」を手がかりに信仰を深めていました。キリシタン大名の中にはローマとのつながりによって経済的・文化的な恩恵を得ようとする者も現れ、1582年から1590年にかけては「天正遣欧少年使節」が送られます。

捕縛と処刑

日本で生まれた「キリシタン」たちは強い信仰心を見せ、1587年になると政治的危機感から豊臣秀吉が「バテレン追放令」を発布します。1596年には宣教師の追放と日本人信徒の改宗を強く指示し、改宗に応じない者が捕らえられるところとなります。

1597年1月3日(慶長元年11月15日)、大阪と京都で24人が捕縛されます。彼らは京都堀川の一条戻橋で左の耳たぶを切り落とされ、市中引き回しに処されます。同年1月10日には「長崎で処刑」されるために徒歩で京都を出発します。

見せしめとして連行される道中、さらに2人が捕縛されました。26人の中には14歳の少年も含まれ、命を救うために改宗を勧める者もいましたが、彼らは信仰を曲げず処刑を選びました。長崎に着くと「キリストの処刑されたゴルゴダの丘」に似た西坂の丘を処刑場所に望みます。

1597年2月5日(慶長元年12月19日)、彼らは磔にされ、槍で両脇を刺し貫かれ絶命しました。

その内の一人「パウロ三木」は丘に集まった4000人の群衆に向かって架上から信仰の正しさを語り、自分を処刑する者を赦して落命したと伝えられています。

信仰を支えた殉教者「Martyres」

26人の処刑に至る道程は、国内のキリスト教信者に対する警告を示す目的がありました。しかし、キリストの磔刑を連想させる最期を辿ったことにより信仰を深めさせる結果をもたらします。

日本が禁教の時代に入る一方で、「潜伏キリシタン」たちの信仰はやはり九州を中心に連綿と受け継がれました。26人の殉教と彼らの高潔な精神も語り継がれ、隠れた信仰を支えました。神父からの説教がない密かな祈りのなかで祈祷文は独自の「おらしょ」が唱えられるようになり、仏教的な観音菩薩像を通して心では聖母マリアを思う「マリア観音」の風習が発展するようになります。1873年に禁教令が撤廃されて以降もカトリック教会に復帰せず独自の信仰を継承し続ける人々は「隠れキリシタン」として、現在も「おらしょ」を唱えています。

また、カトリック教会では殉教者の遺骸や遺物を尊ぶ伝統があることから26人の遺骸は分けられ、世界各地に送られて崇敬を受けます。アジアで最初の、かつ大規模な殉教は遠く西欧でも認知されました。1627年、ローマ教皇は26人の徳と聖性から彼らを、福音を受けた者「福者」に認めました。次いで1862年に彼らは聖人の列に加えられ、「日本二十六聖人」と呼ばれるようになります。当時のローマ教皇ピオ9世は、1862年の列聖式に際して、全世界的な祝福を意味する「ウルビ・エト・オルビ(羅:Urbi et Orbi)」を含めて次のように語りました。

「揺らぐ平和の中で、あなた方のご加護がローマと全世界にあらんことを」

東洋の奇蹟「信徒発見」

26人の殉教から列聖までの200年間は、日本においてはキリスト教を迫害する時代でした。しかし、1858年に外国人居留者の信教の自由が保証されたことを契機に状況が変わります。1865年、列聖した26人に捧げる「大浦天主堂」が長崎の外国人居留地に創建されると、隠れながら信仰を守っていた「潜伏キリシタン」が教会を訪れて祈りを捧げました。長い迫害を受けても信仰が失われることなく、信徒がカトリック教会に発見されたことをローマ教皇ピオ9世は「東洋の奇蹟」と呼んでいます。

1962年、26人の列聖から100年を記念して、彼らが殉教した西坂の丘には「日本二十六聖人記念館」が開館しました。1597年の殉教から400年が経過した現在でも、信仰を貫いた高潔な姿を伝えています。

www.combinir-di-corista.com

@combinir

